

四武臣がこれで、別に石獸二十四、即ち馬、麒麟、象、駱駝、獅子等各々二對づつ、一對は立ち、一對は蹲つてゐる。昌平山水記に曰く「明の宣德十年（西紀一四三五年）四月長陵及び獻陵を修むる時初めて石人、石獸を造り」と、又曰く「大紅門内蒼松翠柏無慮數十萬本」とあり。憶ふに石人、石獸は當時は綠陰風靜かなる地上に賦つたであらうが、今は株を去り根を抜いて、この附近は一樹をも存せず、空しく草野の間に天日に曝露してゐるのである。この附近から前方遙かに天山一帯の山脈を背景として、松林の間に隱顯する各陵の甕瓦紅樓門樓の參差たるを望むであらう。更に進めば又一門がある。題して「陵門」といふ。北部支那においては稀に見る巨材を用ひて、その建築は頗る壯大である。殿側は白石の欄が繞らしてあるが、これこそ長陵中の最偉觀である。殿の後には、白石房、白石臺等があり、なほも進ん

で寶城に至れば、これ即ち御陵で、城下にトンネルが穿たれてゐる。これを登ると、歩路は東西に岐れて城上に達するのである。城上には一樓があり、「長陵」と題してその内に大神がある。尺大の鐵像で、「大明成祖文皇帝之陵」と刻してある。その他の各陵は皆長陵の四圍に散在してゐるが、その構造はいづれも大同小異である。

〔居庸關（チヌイ・ユン・コワン）〕 南口より北進すること約五哩で、兩山の屏立の間を一峽道が通じてゐる。これを形容すると、一夫路に當れば、萬夫進む能はずといふやうな險隘がある。これがいはゆる居庸關で、現今は張家口に通ずる要路である。馬車の往來給驛としてゐて、人家約百戸、こゝに税關が置かれてゐる。關城と稱する圓形の堡壘が、山脚の相迫つて、わづかに一條の溪流を通ずるほどの最險地點に築かれてあつて、左右

の山頂にその羽翼を延ばしてゐる。又關城の中
央には過街塔がある。その南北の大路に石を疊ん
だものが大道上に架してあるが、車馬はその下を
通つてゐる。高さ約三十尺、厚五十尺、土民はこ
れを塔坐兒と呼んでゐる。塔の内部兩側には佛像
及佛經を刻してある。尙居庸關を距る約三哩の
地點に一小城がある。これを上關と稱し、これに
もまた居庸關の二字が刻んである。

〔彈琴峽(タン・チン・シイヤ)〕 居庸關を
距る約六哩

の地點に在る。山勢相迫つて一小峽をなしてゐる
のであるが、往昔清泉石罅に流れて彈琴の響を發
したと傳へられ、それ以來この名がある。峽上斷
崖の間に佛閣があり、規模は小さいが頗る雅趣に
富んでゐる。

〔青龍橋(チン・リン・チイアオ)〕 八達嶺の
東南面頂

界外に接する車站で、山峽の風光はえも云はれぬ
趣がある。殊に長城への觀光者は、當車站に下
車するのを願路としてゐる。前記居庸關、彈琴峽
への探險も、南口よりの攀登路に比して、この地
から下降路をとるのが樂である。

〔八達嶺(ハ・タ・ア・リン)〕 青龍橋
車站の西

約一哩の地にある。山中蜿蜒たる城牆は下石上磚
殆んど北京城壁に、一步を離るのみで、その建築
の雄大さは實に驚嘆に値する。こゝ八達嶺より長
城を望めば、西方は重疊たる連山と共に、遙かに
雲霧に没し、東方は削つたやうな山勢を急下して
深谷に落ち、更に急傾斜の山腹を一直線に走る長
城は山頂に延互する等溪山の間に隱匿して、全く
その体軀は、何日眺めてもあきることがない。
さて京綏線でも一度北京に戻つて、今度は京漢
線によつて北京にしばしの別れをつげなければな

0760